



つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 337号 2011.4.14 発行 社会政策研究所

初の夜間ライトアップ中止 桜の通り抜け 大阪・造幣局



産経新聞 2011年4月13日
造幣局の「桜の通り抜け」のハートフルデーが一般公開に先駆けて行われた＝13日午前、大阪市北区・造幣局（渡守麻衣撮影）

造幣局（大阪市北区）で行われる春の風物詩「桜の通り抜け」に先立ち、大阪市内の身体障害者やお年寄りを招待する特別観桜会が13日開かれ、約2千人が128品種352本の桜を観賞した。

通り抜けは4月14～20日に開催。平日は午前10時、土・日曜は午前9時からそれぞれ午後5時までで、東日本大震災の被災者らに配慮し、例年実施してきた夜間のライトアップは中止される。問い合わせはハローダイヤル（電）050・5548・8686）。

発達障害支援へ専門員 新見市、活動センターに配置

山陽新聞 2011年4月14日

新見市は13日までに、発達障害の支援専門員1人を市障害者地域活動支援センター・ほほえみ広場にいみ（高尾）に配置した。発達障害児・者は増加傾向にあり、発達検査や相談業務を近く開始。就学、就労など幅広くサポートする。

専門員は臨床心理相談員の大賀倫子さん（31）＝岡山市。4月から毎週火曜日に常駐。積み木やカードなどを使って子どもに話しかけ、発達の度合いを調べたり、子どもとの接し方などを保護者に助言する。

現在は小学校や幼稚園、保育所へのあいさつ回りや、同広場スタッフとの打ち合わせを進めており、専用の機材が届き次第、業務を始める。大賀さんは「発達障害への正しい理解が進むよう周知を図りたい。悩みや不安を抱え込まず、気軽に相談して」と呼び掛けている。



相談、検査は予約制で無料。午前9時～午後4時。対象は1歳半以上だが、大人の相談にも応じる。問い合わせは同広場（0867-71-2166）。

国の調査では、発達障害がある小中学生は増加傾向という。市によると、市内の発達障害児・者の数を調べた統計はないものの、同様の状況。市は2011年度予算に105万円を計上し、専門員を配置した。

高齢・障害者施設ごと受け入れ、原発事故避難指示地域拡大視野に計画/横浜市

神奈川新聞 2011年4月13日

福島第1原発事故に伴う避難指示地域の拡大を視野に入れ、横浜市は13日、高齢者、障害者施設の入所者を職員も含め施設ごと受け入れる態勢を整えたと発表した。福島県災害対策本部に連絡しており、要請があれば1、2週間で車椅子など必要な機材などを備え、年内をめどに受け入れる。

横浜市内の老人福祉センターなどで施設ごとに50人程度を受け入れる。現段階で特別養護老人ホームや介護老人保健施設も含め、120施設約500人の受け入れが可能という。また、市野島青少年研修センターでは、施設に入所している知的障害者100人程度を受け入れる。

同行する職員だけでは対応できない場合、市は市内施設の職員らを受け入れ施設に派遣する方針。

「仕事が楽しい」、市が知的障害者を初採用/小田原 神奈川新聞 2011年4月13日

軽度の知的障害がある男性が、4月から小田原市の嘱託職員として働き始めた。配属先の障がい福祉課で、書類整理などの事務作業を担当している。市が知的障害者を採用したのは初めてで、同課は「雇用の課題を探り今後につなげたい」と話している。

男性は市内在住の椎野貴明さん(18)。今春に卒業した特別支援学校から市に推薦があり、審査を通過した。仕事は「種類が多くて、とにかく楽しい」。数千枚に及ぶ同課利用者の個人記録を、1週間かけてあいうえお順や日付順に並び終えたばかりという。

椎野さんを見守る就労支援専門員の山縣好子さん(64)も「最初は心配だったが完璧にやってくれた。数字にも強い」と驚く。シュレッダーによる裁断作業も「バッチリ」と太鼓判を押す。今後は郵便物の集配にも挑戦する予定だ。

雇用期間は1年ごとの更新で、市は最長5年を想定している。同課は「事務処理能力を磨いてもらうことで、民間企業への就職を後押ししたい」と話す。

「彼の一番の課題は漢字の読み書き。少しずつ覚えてもらいたい」と山縣さん。椎野さんは恐縮しながら「がんばります」と応えていた。

手作り品で被災地支援 山科の障害者施設利用者ら 京都新聞 2011年4月13日



募金する人に「ありがとうございます」と笑顔で声をかける利用者ら(京都市左京区・田中京極商店街)

東日本大震災の被災地に義援金を贈ろうと、京都市山科区の知的障害者通所施設「新明塾」の利用者たちが手作りの菓子や食器を販売している。12日にも左京区の商店街の露天市に参加し、青空の下で声を張り上げてお客を呼び込んでいた。

お金の大切さや販売の楽しさを知ろうと同施設は今年1月から毎月1回、左京区の田中京極商店街の露天市で手作り商品の販売を始めた。

3回目の市を前に震災が発生し、施設利用者から「自分たちに何かできないか」と声が上がった。当初、同施設は売り上げの一部を寄付することを提案したが、利用者からの強い希望で売り上げの全額と、利用者や施設職員の給与の一部も被災地へ贈ることに決めたという。

先月(22日)に続き、12日にも市に参加した。利用者13人が作ったパウンドケーキやクッキー、陶器のカップや置物といった商品約100点と募金箱を店頭と並べ、通行人に「みんなで作りました」「お願いします」と声をかけ、笑顔で接客していた。

谷川史朗施設長(47)は「利用者の頑張っている姿を見てもらい、被災地支援にも協力していただいて、人の輪が広がってほしい」と話している。

今回は5月18日(雨天の場合は23日)に開催する。

車から電源、停電乗り切る 釜石の重症心身障害者 岩手日報 2011年4月13日

東日本大震災に伴う停電は、在宅の重症心身障害者にとって死活問題。濃密な医療的ケアが必要で、電動医療機器が手放せないからだ。釜石市甲子町の菊池裕子さん（27）は、家族や周囲の懸命の支えで、震災発生から6日間の停電を乗り切り、笑顔を取り戻した。

裕子さんは施設に入所せず、自宅で父俊二さん（63）、母紀子さん（61）との3人暮らし。電動たん吸引器が欠かせない。

3月11日の地震発生時、俊二さんは日課の散歩中。家にいた紀子さんは、大きな揺れに驚き体をこわばらせた裕子さんに覆いかぶさり、ぎゅっと抱きしめ続けた。

同市甲子町地区は内陸で津波被害は免れたものの、停電に。走って帰宅した俊二さんが機転を利かせ、車のシガーソケットから電源を確保し、たん吸引器を作動させた。

車に残っていたガソリンは半分以下。1日たっても、2日たっても停電は続く。裕子さんが体調を崩しても病院に連れて行くのは難しいため、2人は暗闇の中、付きっきりで裕子さんに寄り添った。

周囲がそんな日々を支えた。ヘルパーや訪問看護師、主治医は自分の家族らが被災しながらも「裕ちゃん、元気？」と訪問。紫波町に住む親戚はガソリンをかき集めてくれた。

紀子さんは「重症者は周囲の助けがないと生きていけない。裕子は人に恵まれているとつくづく実感した」と感謝。16日夕方、電気がついた時は「思わず拍手しました」。

4月7日深夜にまた激しい余震。泣き出した裕子さんだったが、両親が寄り添って落ち着きを取り戻し、8日夜まで続いた停電も乗り切った。

県重症心身障害児（者）を守る会（平野功会長、会員251人）は震災発生後、同会が把握する陸前高田市から宮古市までの在宅重症者25人の安否確認を進め、全員の無事を確認した。

持ち前の無垢（むく）な笑みを広げる裕子さん。その手を握りしめ、紀子さんは「お世話になっている多くの方々が被災し心が痛む。いつの日か被災地に日常生活が戻り、笑顔が戻ってほしい」と願う。

障害者の入所施設 青い鳥成人寮竣工 甲府で式典 山梨日日新聞 2011年4月14日

施設内を見学する人々＝甲府市下飯田2丁目



視覚障害のある知的障害者のための入所施設「県立青い鳥成人寮」の竣工しゅんこう式が13日、甲府市下飯田2丁目の同所で開かれた。

新しい施設は中庭を囲む回廊式の建物で、1階に食堂や作業室、2階に60人分の個室がある。在宅障害者の短期入所が可能になり、年内に古い建物の解体工事や駐車場整備が終わるといふ。式典ではテープカットの後、小沼省二副知事が「入所者の方に生き生きと過ごしてほしい」とあいさつし、

約50人が施設内を見学した。

見学に訪れた甲府市視覚障害者協会会長の市瀬実さん（63）は「昔に比べ格段に環境が改善され、感慨深い」と話していた。

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行